

## 私がオミクロンに!?

少候24家族会員

五十崎 泰博

「のどが焼けるように痛い…。唾を飲み込もうにもできない」

前日の簡易唾液抗原抗体検査キットでは「陰性」という判明であったが、どうもおかしい。念のため、病院でPCR検査を受けると、15分後

に「陽性」と判明した。しかも38度の発熱。オミクロンかどうかはすぐには分からないという。因みに私はワクチンを2回接種している。待つしかない。自宅で過ごすうち、保健所から電話で「入院できる病院が決まるまで待つように」と指示された。すぐに職場の責任者に経緯を報告した。自己判断ながら濃厚接触者（マスクを外して1対1で15分以上会話した相手。私の場合は、決して多くはなかった）に検査していただくよう連絡した。間もなく掛かり付け医の手配で薬局を介して自宅に抗ウイルス薬の「ラゲプリオ」（モルヌピラビルカプセル）が届いた。コロナ感染症の重症化を防ぐ薬で、昨年末に日本でも対症療法に止まっていたコロナに対して、治療のための「武器」ができていた。ニュースでは聞いていたが、こんなに早く自分の手元に届くとは…。効いたかだっ  
て? 1日に2回計8カプセルを服用すると、ほんの数日間で最高39度もあった体温がみるみるうちに低下し、のどの痛みも和らぎ始めた。極めて効果的だったと言える。しかし、依然として入院先は決まらない。掛かり付け医院の医師・看護婦から健

康状態を確認する電話を毎日いたたくも、保健所から直接の連絡はない。

自宅療養はいつまで続くのだろうか。職場には迷惑の掛けっぱなしで申し訳ない思いがする。そうした中で気が晴れたのは、テレビ番組によく出ていたタレントの野々村真が感染後、しばらく療養して見事に快癒し、再び活動を始めたことだった。

人類はウイルスとの戦いを繰り返して続けた。百年前には「スペイン風邪」が蔓延し、世界にひどい災厄をもたらした。

当時の感染経路はいかなるものだったか。調べてみると、中国・広東省出身の労働者の一人が出稼ぎ先の米国カンザス州で発熱した。ウイルスはファルストン陸軍基地の兵士にうつり、折しも第1次世界大戦の備えで欧州に派遣された米国軍兵士からイギリス軍→フランス軍→ドイツ軍へと広がった。死者数当時の人口の30分の1にも達し、5千万人と

も1億人以上とも言われる。第1次世界大戦による死者が1千万人と云われるから、どれほどひどかったか。感染の広がりの主因の一つとなったのは、各国がスペイン風邪を軍事上の機密扱いにしたからだ。ウイ

ルスによる戦力低下が敵に知られないよう情報を抑えたことがパンデミックを引き起こしたとも言われる。

当時の日本はどうだったか。最初の犠牲者は日本が統治していた台湾を巡業していた大相撲の力士たちだった。屈強な肉体を持った彼らもウイルスには勝てず、3人（現在の尾車部屋所属）がなぞの急死を遂げたことで世間は「相撲風邪」などと呼んだ。

宮沢賢治の妹トシもスペイン風邪にかかった。幸い、トシは回復するも、その翌年に結核を患って24歳の若さで命を落としている。亡くなる直前、トシは賢治に頼んでとつてきてもらったみぞれを食べ、「さっぱりした」と喜ぶ。賢治の名作「永訣の朝」には、「あめゆじゅとてちてけんじゃ」フレーズが繰り返されている。

スペイン風邪では、当時の内閣総理大臣・原敬が横須賀線車両内で罹患し後に回復した。劇作家として有名な島村抱月はスペイン風邪で亡くなり、松井須磨子は後追自自殺している。横須賀軍港内では軍艦「周防」の乗組員150名が罹患している。呉を母港とする軽巡洋艦「矢矧」は

海外で48名の死者を出した。駆逐艦隊で罹患者が出たのは、対Uボート作戦で地中海に派遣されていたときのことだ。シベリア出兵中の小倉第12師団、第3師団にも多数の死者、罹患者が出た。

結論を言えば、日本はスペイン風邪の原因を究明できず、何も学び得なかつたため、45万人もの人命を失う結果となった。

当時の世相は関東大震災（死者10・5万人）の大災害と復興、第1次世界大戦後の好景気の最中であり、こうした災禍と僥倖が目に見えないウイルス禍を覆い隠したとも言える。

そうは言いながら、現在と過去、そして世界と日本の現状を比べれば、感染者が急増しているとはいえず、日本は圧倒的に罹患者も重傷者も死者も少ないと言える。

日常的なマスク着用と手洗い、三密防止、そして高いワクチン接種率も併せ考えれば、なかなかうまく対応していると言えないか。

こうしたことを考えているうち、保健所から自宅療養期間は「終わり」電話連絡があり、役所からは3回目ワクチン接種案内が届いた。おそら

くオミクロン体験で抗体もいくらかできたはず。さらに3回目のワクチン接種で「ひとまず安心」かも知れないが、これからも感染防止に努めていくのは言うまでもない。

一連の感染体験から言えるのは、日本をさまざまな災禍に耐え得る国家にしたいということだ。コロナでダメージを受けた経済の再生もしっかりやってほしい。コロナ後の増税などもつてのほかだ。経済を再び軌道に乗せることを最優先させてほしい。

最後に安全保障に関することで一言。一連の米軍兵士のコロナ感染状況を考察するに、極めて防疫体制が脆弱である点、更に日本の自衛隊員（陸海空共に）の感染率の低さを見ると、防疫体制がうまく機能していると思えるが、このウイルスを不完全な兵器・武器と見なすと空恐ろしいものを感じる。原爆や水爆よりも更に悲惨な状況が眼に見えてくる。皇室・国民を守る意味からも、この脅威を取り除くことが急務と考える。以上の点を踏まえて、安全保障体制をより強固なものにすることを希望して筆を擱きたい。

22 / 1 / 20 記